
I think this way

雪猫だいふく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I think this way

【ノード】

N2466R

【作者名】

雪猫だいふく

【あらすじ】

日々の恩着と後悔と、出来ることなら幸福を、書ければいいと願います。

今日といつ日

何も無く、何もせず、ただ流れていぐ時間。今日といつ日。
そんな時間を過いでいるとき、ふと、背中を撫ぜるふやかな感触。

漠然とした不安、今日といつ日のことな後悔、自己嫌悪。

何か特別なものを求めているわけではないけれど、

確固たるアイデンティティとともに、毎日を生きていきたい。

やつ出来れば、きっと自分も幸せになれるとい

何の根拠もなく何の保証もなくそつ信じながら、

それだけをいつも望んでいる。

幸せな明日を。

必要性

明確な必要性も、意味も持ち合わせていない自分。

それに対して嫌悪は無い。今のところは仕方の無いことだと思っている。

そもそも人間は必要性があつてここにいるのではないのだ。

この世界に生まれたのは、きっとみんな無意識であるはずだから。意味も必要性も、元々備わっていない。

それでも生きている。川に沈んだ石いしが、水面みなくち越しに見上げる太陽の光のよ^ううな、そんな透明かつ穏やかでやるせない、そんな感覚の中で。

理由（前書き）

理由

幸せになれない理由。今現在なれない理由。

それはきっと、今までの行動理由が「幸せを求めていたから」ではなかったから。

不幸になりたくなかつただけ、不幸から逃げていただけ。

逃げて、ただ誰かに言われたとおりに無難な選択肢を選んできただけ。

その結果、生きているだけの存在となつて、自分はただ存在している。

その苦悩は、覗として受け入れよう。

そして次こそは間違わないよとい。

今はまだ、やり直すことが出来るから。

筋書き

今日、仕事で小学校に。

見せてもらったのは、大人たちの書いた筋書き。

表面上はホタルの復活活動、本当の所は情緒教育。

別の専門家に聞いた。子供達に育てられ、川に放流されるホタルの生存率は、実質1%。

100匹に1匹。

後はみんな死んじゃいます。

今年は8万匹放流したそうです。

夏になつて、800匹のホタルが飛んで、それを見た子供達は喜ぶでしょうね。

でもまあ、そんなものなのかな。

でもやっぱり、どうしても、苦笑い。

麻痺

いつも自分は考えていました。

通勤時間に、仕事の合間に、家ではずっと。

それは自分の過去であつたり、現在であつたり、未来であつたり、ずっとと考えています。

彼は言いました。

「いざれ麻痺していく」と。

知っていたけれど、

そんな言葉は聴きたくなかった。

考える余裕すらいざれ無くなる、なんて、

残酷です。無慈悲です。救いようがありません。

「人間は考える葦である」

考えない人間は、ただの葦である。

そなのは、

「俺は嫌だね」

可能性

無限の可能性、といつ言葉を最近よく聞く。

「無限の可能性」、それはきっと希望といつ意味合いでよりも、戒めの意味合いで強い。

その中に、ハッピーハンドの可能性と共に、バッドハンドの可能性が確実に内包されているのだから。

王子様が助けに来ない「白雪姫」、魔法使いのいない「シンデレラ」。

そんな物語を、まるで知らない素振りで奴等は謳つ。

僕らの未来に内包された、「無限の可能性」を。

只々、それは素晴らしい事の様に。

叶わない不变性

例えば、

川に流れる椿の花の、何ともいえない残酷めいた哀しさとか、

晴れた青空の田、団地にはためいている色とりどり洗濯物を見たときの平和感とか、

雨上がりの、しつとりとした森に薫る草木の匂いとか、

冬の夜の、冷たくて鋭い研ぎ澄まされた空氣とか、

春風の切なさとか、

そういうものを最近よく感じるのはいつになつて、

巡る季節、その回転の中で、確実に自分が変わっていくことを、そのことで実感して。

大人になるのは嫌だなあ。

防衛本能

考える、という行為は、防衛本能に近いものだと、僕は思っている。考えている、といつことば、考えなくてはいけない状況にいる、といつことなのだ、とも。

つまりは白血球みたいなものだ。精神には入り込んだ不安という不快要素を排除するために働く。過剰になればアレルギー反応を起こす。

つまり、考え過ぎるな、といつのは、過剰反応をやめる、ということなのだろう。それは正しい。しかし過剰か過剰でないかという判断基準は、極めて難しいことだ。正しく正確にそれが出来る人間は、すべからく天才であると僕は思う。白血球はコントロール出来ない。

つまり無理難題。考え過ぎるな、といつ要求は極めて高度な要求なのだ。

藤の花

五月に藤の花を見に行って、

それを見ていたら、不意に、自分がまだ保育園だった頃のことを思い出した。

藤の花を、葡萄の花だと思っていたこと。熊蜂に追いかけられて泣いたこと（あの頃は熊蜂とスズメバチがごっちゃになつてて、熊蜂に刺されたら死ぬと思ってたこと）。

そんな日もあつたなあとと思いながら、同時にその感情にこそ、「もう大人なんだから」と、言われているようだ。

「だから、そろそろ大人らしくなりなさい」とも。

まあ、そのうちに。

始まりの夕景

雨上がりの夕焼けが一瞬、信じられないほどの赤色を空につけ
に広げ、消えていく。

梅雨もそろそろ終わり。まだ咲いているアジサイの花も、そう遠
くない日に姿を消していくだろう。

また、あの夏が来る。もうすぐだ。

後悔と絶望と始まりの季節。

死ぬ気力も無かつた自殺志願者が、少しだけ元気を取り戻し、快
活に血を流す様な、人生に絶望した人格破綻者が、忘れていた憎し
みを思い出し、剣呑な表情を浮かべ再び立ち上がる様な、そんな季
節。

3年前に見たのは、落ちぶれた自分を素知らぬ顔で、むりやりと照
らす太陽。

世界と自分との無関係さに、自嘲氣味な表情で笑い、生き残りえ
た。

夏が来るたびに思い出す。これからもきっと、ずっと。

思い出は無残なものだけれど、悪い季節ではない。
自分は夏が好きだ。

自殺するなら、夏がいい。

今年は向日葵園に行こうと思つて。¹

ここ数年、見ることの無かつた向日葵の花を思つて存分見たい。
そして、また始められればいいと思つ。

本当のホントは、出来ぬことない、生めることがや。

今日読み終えた本が3冊、
今日新しく買った本が4冊、
まだ読み終えてない本が1冊。

弁当箱、携帯電話、i pod、財布、日焼け止めクリーム、メモ帳とペン。

それと、今日貰った梨が一つ。

結構重い。
でも持ち歩く。
捨てられないのは何故か。
何故だろう。
捨ててしまえば、きっと軽くなる。
だから捨てない。
価値あるものはいつだって、重いものだ。
軽い人生なんて、つまらない。

人生には、重みが無ければつまらない。

きつとそういうことだ。

answer

独りにもなれないのに、「死にたい」なんて言つべきじゃない、と言われた。

他でもない自分自身に。

知つていること。

過去に、死にたいと思ったことが確かにあった、ということ。

過去に、楽しいと思ったことが確かにあった、ということ。

「生きていれば、何かきっと良いことがある」といつ言葉は、既に使い古された言葉だが、不正解だ。

そんなものは、自分次第のことだから。

それぐらい解らなければ、生きる資格はない。

そう自分に言い聞かしている。

いつかまた、死にたいと思つときが来る、といつことも知つている。

人間のおよそ半数は、許容出来そうにない。

世界の八割方は、気に入らないもので構成されている。

いつか、何処かの誰かに殺されるかもしれない可能性を、僕はいつもだつて自覚している。

それでもまだここにいる。

「どうして貴方は生きているの？」
「それが、すべての答えだからだ」

「生きていて良かつた」、なんていう戯言を最後の最後に言った
ために、僕たちは生きているのかも知れない。

失敗の無い人生は無い。失敗してこそ得られるものもある。それは分かっているつもりだ。でも、こうも失敗続きの人生では、どうも気が滅入ってしまう。

そして何が一番の問題かというと、人生といつものほどれだけ気が滅入ろうが、嫌だ嫌だと叫ぼうが、そう簡単には辞められないことだ。

人生という仕事に、休日は無い。

他人から見れば、きっとなんてことは無い日常の中で、僕はいつも慎重に、息を吐いている。

無意識に生きられない自分は、何か間違っているようにも思う。でも今は、それで精一杯だから。

また明日。

年は暮れる

時間の流れはいつだって、止まることもなく一定。僕がどれだけ失敗して、落胆して、傷を受けても、終わらない。連続する一秒は流れ続ける。

年は暮れる。

僕が何かを成したとしても、或いは何もしなかったとしても、変わらずに。

それが良いことなのか悪いことなのか、そう誰かに聞かれたなら、僕は「良いことだよ」と言つことにする。曖昧な答えは既に聞き飽きたし、それに僕は、そうであったほうが良い、と思うから。

それこそが、この一年に置ける僕の進歩だろう。

植物は、どんなに枝を切られようと、葉を落とされようと、空に向かつて伸びることをやめない。

誰を恨むことも、憎むこともなく、蕭々と。

現実的でなくとも、僕はそつあるように日々努めていきたい。意味などなくとも、理想のために生きていきたい。

孤独なんて何処にもない

もしも近所で事件が起きていたとして、今警察に「どうしてこんな時間に外を歩いていたんだ」と聞かれたら、僕はこう答えるだろう。

「月が綺麗だつたので」

理由なんてそれで十分だと思つ。

冬の夜は寒いけれど、散歩するには都合がいい。夏なんかは、歩いていると蜘蛛の糸が張り付いてきたりするし、春や秋は過ごしやすい分、夜とはいえ人が意外と多い。

だから冬が一番いい。

買ったばかりのダウンジャケットを着て歩く今日の夜は、中々いい夜だつた。

音楽を聴きながら空を見上げて、これからの事を考えた。
細かいことをここに書くには、少々時間が足りないけれど。それだけたくさんの事を考えた。

一人で、誰もいない海の見える道を歩きながら。信号機の光に合わせて、点滅する自分の影を眺めながら。月を見上げながら。

誰もいない。

一人だけ、自分がいる。
悪いことではない。
必要なこと。

孤独なんて何処にもない。

天気がいい。でもその青空は寒さは和らいでくれはしない様で。外に出ると、その空気の冷たさと晴れた天気が、私に一年前の自分がフラッシュバックさせた。

一瞬息を止めて、でも直にそれをやり過げしゅくじと息を吐く。それはただの過去の自分だ。『私』じゃない。一年が過ぎて、その時間の分だけ私も違ったものになつた筈だ。でも、いつまで経つても消えないこのもやもやとした息苦しさは、いやはやどうしたものだろう。がんばつてゐつもりなんだけど。

「がんばつてゐつもりなんですが」と言つと、

「『つもり』じゃ駄目なんだよ」と怒る人がいる。

がんばつたのは本当です。でもどうしても結果が出せなかつたんだから『つもり』なんです。

失敗して、それで「がんばりました」なんて、腹立つだけでしうが。

それとも、なにが何でも結果を出せと言いたいのか。

だつたらそう言えばいい。

そのほうが断然、好感が持てる。

なんて、

誰に言つてんだか。

うん。

でもまあ『つもり』なんて言われたら、反射的にやる氣を疑つて

しまつのも分かる気がする。

言い訳してるつもりじゃないんだけど。

ああ、また『つもり』だ。

なんだか、何も言葉にすべきではないのかもしれない。
というか、もつ何も言葉にしたくないな。そう思つてしまつ。

誰にも関わらなければ、煩わしい思いをしなくて済む。
本気でそう思つてゐる自分が、自分の中にはじめることを知つてゐる。
でも、それは無理。
知つてゐや。

すべての嫌な事から逃げ切つて、その後に残るのは幸福だけ、な
んて事にはなる筈がない。

残るのは私一人だけ。

逃げてばかりでは何も得られない、ところはまつこつこと。
今になつてそれを知る。
だから私たちは、戦わなければならぬ。
それが、がんばるといふ事。

そうだね？

そう。

そういうこと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2466r/>

I think this way

2012年1月14日20時50分発行